のど自慢大会の１枚。時に会場は爆笑の渦に包まれていました。

出来事から分かる国民色

青年海外協力隊 2018 年度１次隊　派遣国：トンガ王国　伊藤有未（三郷市）

今回は、任地での出来事について紹介します。情報伝達は基本、各村の会議のアナウンスとなりますが、口コミで突発的に広がることも多々あります。

①のど自慢コンテスト：トンガ全土で地域予選が開催され、勝ち抜いた者は首都行きのチケットを手に入れることができます。隣人に誘われ、私も島予選を観覧に行きました。自慢の歌唱力を披露する人から、家族や友達同士で楽しく歌う人と出場者は様々。審査員２名、司会、音響担当と本格的で、初開催ということもあり、会場も満席でした。映画館やカラオケ等の娯楽施設がないトンガで、皆で一緒に楽しめる当企画は、大盛況のうちに終了しました。

自宅近く、綺麗に手入れされた庭。
ずっと保ってほしいです。

②エウアマサニコンテスト：各エリア

対抗のクリーンアップコンテスト。エウア島にはアパートやマンションがなく、平屋住宅だからこそできる取り組みです。女性たちを中心に自宅周辺のゴミ拾いと敷地内の庭の手入れを行います。自宅前にタイヤで作った鉢に植物を置いたり、2 色の布で旗を作り 家のフェンスに取り付けたりと見せ方は色々。またエリア毎に特徴があり、その違いを観るのも楽しみの 1 つです。人々の生活にイベント性を持たせる発想、活動でも取り入れてみたいと参考になります。

③ノヌ（日本では、通称：ノニ）の回収：日本では美容や健康食材としても有名です。口コミでどこからか「お金になる」と聞きつけた現地スタッフ。そこで複数のスタッフが協力して、仕事時間中にもかかわらず、職場の敷地内にあるノヌを採り始めました。（日本では考えられないですが、やはりここがトンガ！）収穫後、買い取ってもらうため回収元へ行くと、他にも沢山のノヌを持ち込む人たち。核家族化が進み 、地域住民のつながりも薄れる日本社会とは異なり、トンガではフレンドリーな国民性に加え、ご近所や親族という確立されたネットワークで、瞬く間に情報が広がります。そんなトンガで、人とのつながりを重んじながら生きていくことの大切さを日々教えてもらっています。

これがノヌ。皆、白い実を採り、緑色ではまだ早いそうです。
日本で身近に見ることのない植物もあり、日々発見の多い生活環境です。